



ほふふ

◆建設的な生き方へのお手伝い (Just do it!) ◆
 (カウンセリングのことは当社までお問合せ下さい)
 【今月の一冊】統計学が最強の学問である
 西田 啓 著 ダイヤモンド社
 ホームページ URL <http://www15.ocn.ne.jp/~prime21/>

発行日 2013年6月1日 Vol. 128
 発行元 有限会社プライム・コーポレーション
 代表取締役 渡邊 敏徳
 〒401-0015 山梨県大月市大月町花咲147番地
 TEL 0554-22-2810 FAX 0554-22-2859

カオスの縁

利子率革命

ある本にこんなことが載っていましたのでご紹介したいと思います。

“どじょう”と言ったら何をイメージしますか。やはり「どじょう鍋」でしょうか。最近では「どじょう総理」ですかねえ・・・？もう記憶にはないかもしれませんが。

今、日本はどじょうを中国から輸入しているそうですが、中国からは日本への輸送手段は「空輸」で行っています。しかし、その空輸される間に80%のどじょうは死んでしまいます。空輸の際の水槽の揺れがあまりにも大きく生存できないということです。これでは仕入原価が高くなり大変なことになってしまいます。

そこで考えられたのが、どじょうの天敵のナマズを水槽の中に一緒に入れるという案でした。ナマズをどじょうと同じ水槽に入れると、ナマズは中国から日本に飛行機が向かう間にどじょうを食べまわります。ナマズがどじょうを食べる数は水槽全体の20%にもなります。

しかし、不思議なことにナマズを入れた水槽では、一匹のどじょうも死ななかつたのです。ナマズに食べられたどじょうの数だけが損失になり、輸送効率は20%から80%の4倍に飛躍的になったというお話です。

私たちの身近なことを見回してみると、このどじょうの話と重なることがあると思うのです。私たちはどうしても「安定」を求めがちです。組織は知らず知らずのうちに保守的になっていきます。組織の長が、ナマズを入れようとしても、抵抗勢力は組織内にあり簡単にはうまくいきません。また、歴史がある伝統的な組織ほどナマズを入れづらくなっていると思います。

秩序ある安定した中に混沌としたものを組み入れることは、下手をすればすべてを崩壊させてしまう危険性をはらんでいます。ナマズは20%のどじょうしか食べませんが、100%のどじょうが食べられてしまうことも考えられた訳です。

いわゆる、結果が原因に比例しないという何もかもが、自分の思い通りにならない世界に私たちは生きています。しかし、安定と混沌をある平衡に導く力を持っていることがわかってきました。その平衡点のことを『カオスの縁(ふち)』と呼びます。新しいアイデアや革新的な考え方が、今までの価値観や古い慣例を打ち砕いていける可能性を秘めていることを理解し、いろんな事へチャレンジしていきたいと思っています。



あまり聞いたことがない言葉ですが、みなさんは『利子率革命』という言葉を目にしたことがありますか？実は私も初めて知りました。

『利子率革命』とは、具体的に2%以下の超低金利が長期間続く状況を意味します。それは、10年以上にわたって超低金利が続くと既存の経済、社会システムが維持できないというもので、まさに『革命』的なものです。

実際に日本の10年国債の利回りは、1997年9月に2%を下回って以降、現在に至るまでその水準が続き、2012年の時点で16年目に突入しています。これまでの超低金利の最長記録だったイタリア・ジェノヴァの11年(1611年から1621年)をも上回って、20世紀末から前人未踏の超低金利時代の真っ只中にいます。

17世紀初め、「イタリア諸都市の台頭」と「利子率革命」が中世を終わらせ、近代の幕を開けたのと同じように、21世紀において「新興市場国の台頭」と「利子率革命」は、利潤デフレ、賃金デフレなどを生む中で、現代のシステムを終焉させつつあるかもしれません。

過去の歴史から見ても、時代の転換はやはりゆっくりとしか進みません。「長い混迷」の時代にはいろんな面で不安定なことが続きます。そんな時代の変り目には不安もありますが、逆にチャンスも生まれます。いろんなところにアンテナを張り、混迷の時代を生き抜いていきたいと思っています。



【座右の銘にしたい名言】



困難な情勢になってはじめて誰が敵か、誰が味方顔をしていたか、そして誰が本当の味方だったかわかるものだ。

(小林多喜二/作家・小説家)